

宮田和明先生を偲んで

加藤 幸雄

宮田先生の死は、ほんとうに突然でした。青天の霹靂という言葉がそのままぴったりです。病床に臥していた陸游が突然起きあがり、筆を走らせるたとえであれば幸いだったのですが、そうはいきませんでした。

弔辞は、何かに憑かれたように、一気に書き上げました。その中に「宮田さん」が集約されたらと、いまも思っていますので、それを、ここに掲載させていただきます。揮毫は、子ども発達学部の大和田孝士先生に、ご無理を言いました。

弔 辞

宮田先生

先生とこんなに早く、お別れが来ることを誰が考えたでしょうか。
つい先日お話した時の笑顔が、まだ残像として残っています。
ゆっくりした口調の、説得力のある言葉が、ジンと胸に迫ります。
澄みわたる、たからかな歌声が耳の奥でざわついています。
やさしさに満ち溢れたまなざしが、まだそこにあるような気がしてなりません。
しかし、私たちの目の前からおられなくなったのは現実なのですね。
広がるふくしを見据えて、「ふくしの総合大学」づくりの先頭にたたれた先生、
福祉の研究拠点大学の証しである COE 獲得に歓喜された先生、
そして、多数のドクター輩出をリードされた先生、
南京大学や延世大学との学術交流における生き生きとした表情の先生、
特色ある教育の実践では、驚くほどの達成に私たちを導いてくださった先生、
日本社会福祉教育学会会長として、
また、日本社会福祉学会など多数の学会になくはない存在の先生、
山形県最上町などの連携自治体や、提携社会福祉法人との関係を重視された先生、
愛知県をはじめ多数の審議委員を歴任された先生、

パトミントン部の中部連盟会長として誠実に職責を果たされた先生，
全国を飛び回って，同窓会や後援会との協力を大切にされた先生，
そして，元旦の自宅でのゼミ同窓会をはじめ，卒業生にやさしく心配りされた先生，
いづくせないほどの達成とまごころを先生は私たちに遺してくださいました。
私的な生活では，ホロ酔い気分で，驚くほどシャープな洒落が受け，
豊かな声量のカラオケに，店中が静まり返り，
スキーでは，正統派のなめらかな滑りに拍手喝さい，と
どこでも，先生のお人柄がにじみ出ていました。

宮田先生

先生のそうしたお姿を目の当たりにし，
一緒に時間を楽しむことはもうできないのですね。
先生のお写真をみていると，まあ，そんなに思いつめないで，
肩の力をぬいて，あっはっはっは，という声が聞こえてくるような気がいたします。
宮田先生，
先生が遺された貴重な財産を私たちはずっと大切にいたします。
宮田先生，長い間，ご苦労様でした。
どうか，安らかにお休みください。

2010年2月7日

日本福祉大学 学長 加藤幸雄

実は，あとで気がついて，2010年6月6日の学園創立記念日に行われた「宮田前学長を偲ぶ会」においては，「スモンに関わる調査研究」に長く関わってこられたことを付け加えました。「スモンに関わる調査研究」成果を示す抜き刷りを何回かいただいておきながら，難病，キノホルムといったキーワードしか思いつかない不明をお詫びしないといけません。

直接の病因は，間質性肺炎の悪化だと理解しています。実際のところは，学長6年間の「澱」のようなものを感じます。私も学長になってみて感じたことは，外から見ているのとは大いに違って，意外にストレスフルなものだということです。まして，宮田先生は，私のように鈍感ではなく，繊細なアンテナをいつもフル稼働させておられた方ですから，その労苦はいかばかりのものであったかと推察いたします。

私が宮田先生と初めてお目にかかったのは，本学に赴任してまもなくのことでした。当時の印象も，その後お付き合いが深まってからの印象も，ほとんど変わらないのが，宮田先生の最大の特徴と言え，そのとおりです。折り目正しく，相手の意見を丁寧に聴いて，言いすぎもせず言

いそびれもなく、常に仮説を意識しながら慎重にお話しされる方だった、といまも思っています。ペダンティストとは対照的な、研究者の謙抑を、いまはなつかしく思います。

宮田先生が1991年4月に社会福祉学部長（兼大学院研究科長）になられたとき、私が学部長補佐に就任しています。当時は、部部長、部部長として別個に選挙がされていましたが、このころからは、学部一体運営の気運が強まっており、私は補佐官を任じたつもりでした。印刷ミスで、「学部超補佐」と文字が打ち出されて大笑いしたことも昔話です。児島美都子学部長、大泉溥学部長補佐の時代に社会福祉士資格導入をめぐる大激論が行われ、続く、竹中哲夫学部長、笛木俊一学部長補佐の時代に「土」制度をうまく受け入れるための地ならしが行われ、続く宮田内閣に社会福祉実習教育論、社会福祉教育論の確立など、安定的な社会福祉（学部）形成が託されたのでした。宮田学部長には「長期政権」が期待されていたと思います。しかし、草鹿外吉先生の急逝で宮田先生が副学長になられ、宮田先生が学部の中心からは外れることとなってしまいました。余談ですが、児島＝大泉時代は先生たちの頭文字を並べ、激動を意味する「OK牧場の決闘」時代などとも呼ばれ、竹中＝笛木時代は、流れるような連続改革という意味をこめて「竹笛コンビ」とも言われたりしました。次には「和幸」時代が来るはずでしたが、それはかないませんでした。

私はというと、宮田副学長の下で学生部長として全学運営に関わることになりました。爾来、宮田先生が病氣療養中であつた諏訪学長時代を除けば、私はずっと宮田先生の副官を任ずることとなりました。諏訪学長の要請で私が副学長を2期務めたので、宮田学長の下では少し休むつもりでいました。しかし、宮田先生にうまく説得されてしまいました。「私とあなたとはタイプが全く違うので、あなたがいないと歯車がうまく回らない」と言われたと記憶しています。よくよく考えれば、タイプが違う方がやりにくいこともあるのに、本当のところは何であったのか、いまとなってはわかりません。ひょっとしたら、私は御釈迦様の手の平の上になだけなのかもしれません。

お亡くなりになるまで、宮田先生は下戸だと思い込んでいました。それが、毎日晚酌をしておられたことを知るにつけ、普段外では抑制されていたんだということがわかり、抑制できるところが宮田先生らしいと思いました。ときどきカラオケにお付き合いいただきましたが、先生のそれは「ナマオケ」であり、東海林太郎ばりの姿勢の崩れない美声には、後が歌えないという「地団駄を踏む」がオマケとなりました。そこでも酒はたしなむ飲み方でした。（尤も酔いつぶれている私に正当な評価ができたという保証はありません。）スキー合宿を毎年欠かさず行われていたことは、案外知られていません。そこではたいていワインを持参され、ゆったりした表情で飲んでおられる姿が印象的でした。私はスキーよりも「ウィ」スキー派で、ご一緒するものの、スキー場の酒場に逸れ、不肖の弟子を任じていました。

私は臨床心理士のはしくれということもあり、質問紙による自己評定を先生にしてみらうつもりでいました。それが叶わなかったのが、生前の先生の言動を総合して、バーチャルにテストを

使い、私なりに人物像をスケッチしてみました。初対面から「変わらぬ印象」と述べましたが、みなさんは、どのように思われるのか。下にスケッチを記してみます。

バーチャル・テストでの概評としては、日本では男女ともに全般的によくみられる「優等生」タイプとの結果が示されました。

《自分としてやるべきことははっきりしている。自分なりのルールが明確で、そこから外れないように振る舞う。まんべんなく目配りできる高い知性と教養を持ち合わせていて、理に反することに對しては厳しく対処する。ともすると近づきがたい印象を与える。学術的な取組みに対しては貪欲である。仕事にとりかかれば没頭し、わき目も振らず完遂を目指す。雑音に左右されない。達成は限りなく完璧で納得のいくものでなくてはならない。他人からは、そこまではいいのに、と思うことでもこだわりがある。正しいことを一生懸命やれば、周りも理解してくれるはずだという信念がある。だから、のんびりと仲間と騒いだりする暇があれば、自分の目的に従いコツコツと努力していることを好む。趣味ははっきりしている。高尚なものに傾く。趣味と言っても全くの遊びにはならないところに特徴がある。地道な努力により地歩を固めるタイプで、冒険は避け、安全第一、万一の危険には備えを怠らないというのが真骨頂である。》

こう示すと、知らない人には随分堅物のように映りますが、実際は、落語をこよなく愛し、駄洒落は天下一品との定評がありました。まじめな会議の席でも、ぼつりとそれがでるところに、バーチャル・テストでは現れない、先生の人間の深みがあるうというものかと思えます。また、宮田先生からすれば対極にあるような、ある意味「分らず屋」の私を温かく包みこむ人間的な奥行きが、すごいところだと思います。先生とお付き合いいただいた長い月日に、感情的になられたことは思い出せません。しかし、感情（主に怒り）表出を必死に押し殺されている場面には何回か遭遇しています。

先生のお話しが最後に文章となって発刊されたものは、「第2回提携社会福祉法人サミット報告集」だと心得ています。「再編期の社会福祉 動向と課題」と題する講演録では、「流れは変わりはじめたか」と情勢に鋭角的に切り込まれ、同時に、社会福祉制度改革の流れを冷静に分析されています。

内容を要約すると、介護保険制度が始まった2000年の改革の基本理念は、1995年の社会保障制度審議会の、いわゆる「95年勧告」にルーツがある。措置制度廃止のメリットは、利用者が自由にサービスを選択でき、多様な供給主体の競争によりサービスが向上するということがあったが、果たしてどうなのか。うまくいかない理由の一つとして、「新しい社会連帯」（のちに「新しい公共」）では、国がどのような責任を持つのかははっきりしないことがあげられる。そのほかに課題としては、i「持続可能な成長」と「社会保障の守備範囲の限定」をどうするのか、ii「世帯単位」から「個人単位」の制度切り替えが可能か、iii 保険料中心の負担は納得されやすい（95勧告）が、国民のすべてに負担が可能か、が考えられる。「社会保障制度＝セーフティネット」という考え方は、守備範囲の限定とは違った意味で問題である。一般所得層の

生活問題は、社会保険で対応できる。それ以下の層は、社会保険、社会福祉、公的扶助の組み合わせが必要という考え方は、いまも変わらない。過度の競争社会が、倫理の荒廃や精神的・文化的退廃を広げている事態は深刻である。また、非正規雇用の拡大による格差社会の進行、児童虐待の悲惨さ、自殺の増加などの社会問題に対して、個別の対策ではなく、構造的な改善のための対応が求められる。いま改めて、子どもの貧困を含む貧困問題に焦点をあて、社会福祉の原点（1962年の社会保障審議会の考え方）に立ち返った取組みが求められる。

2010年2月、先生が亡くなられた直後に刷り上がった報告集を読んでいただけることを希望します。

思い返せば、私が宮田先生の書かれたものに出会ったのは赴任前だと記憶しています。社会福祉事業本質論争に興味を持ち、門外漢の私が関係書籍を必死で読んでいた時、この展開過程に批判的検討を加えられていたお一人に宮田先生がおられることに気づきました。本質論争の評価はともかく、政策、制度、方法、実践は一体のものであり、どの側面から評価が加えられるかによって見え方が異なるということを学ばせていただいたように思います。

社会福祉制度政策論、社会福祉理論、社会福祉発達史が、やや細っている印象を持つのは私だけでしょうか。臨床や実践は、それ自体として有用です。しかし、俯瞰的な見通しのない方法では、切れの悪い包丁になってしまうでしょう。

宮田先生の願いは、社会福祉の原点に立ち返って、福祉社会の展望を示すことにあったのではないかと考えています。

研究再開のために、アパートの一室に山のように積まれた専門図書は、所有者を失い、嘆きの声をもらしています。宮田先生の後を継ぐといった古典的な発想はありません。しかし、受け継がなければならないものは、それぞれの研究や教育、あるいは社会実践のなかで、確実に実らせていくのが、遺された者に課された役割ではないでしょうか。

宮田先生は、囲碁や将棋にも親しんでおられました。熟考の先生にとっては、まだまだ打つ手をいっぱい持ちながらの早逝ではなかったかと思います。しかし、先生の人生は、黒白を超越して、十分に天元を臨む碁形になっていたのではないかと思います。

(先生の一周忌にあたって)

《先生の主な学歴・職歴など》

28歳	1966.3	名古屋大学経済学研究科博士課程単位取得満期退学
31歳	1969.4	本学赴任
41歳	1979.1 - 1980.12	研究委員長兼社会科学研究所長
42歳	1980.1 - 1980.12	大学院研究科長兼務
53歳	1991.4 - 1993.3	社会福祉学部長兼大学院研究科長

社会福祉論集 追悼号

55 歳	1993.4 - 1999.3	副学長
60 歳	1998.3	東洋大学より博士（社会福祉学）学位授与
64 歳	2001.10 - 2004.10	日本社会福祉学会副会長
65 歳	2003.4 - 2009.3	学長
68 歳	2005.10 - 2010.2	日本社会福祉教育学会会長
72 歳	2010.2.5	逝去